

平太の渡しの思い出

「平太の渡し」「淀川」「太子橋小学校」「江野川」の思い出

昭和31年頃の平太(田)の渡しは無料で、自転車や通勤通学の人
が立ったまま乗っていた。子供だけでは乗れず、夏休みに大人
の側に隠れて乗る小中学生もいたが”船頭さん”は怒りなが
ら川岸から離れると”あきらめて”いた。

私の10歳当時、近所の男の子達を連れて淀川へ魚釣りに行く
余り笑わない、いつも強面の70歳前後のおじさんがおられ
た。時折後ろからついて行く女子の私におじいちゃんは気にも
せず、淀川の川岸から大分川中の石ころの積まれた釣り場
(水制)で、木切れに釣り糸と、釣り針にミミズの釣り餌をつ
けてわたししてくれる。モロコ、小ブナ、もう忘れたけれど
他の小魚もつれる！大き目のフナは、おじいちゃん達が自宅
へ持ち帰り、大家族の食卓に並んでいた。私は退屈するとタ
ニシ取りもし、それを近所、小学校の女友達とおひな祭り
に母がバラ寿司・蛤の清し汁とともに、わけぎの酢味噌和え
にしてくれて食べることの出来たほどきれいな川を思い出
す。男の子はザリガニ取りも、又遊泳禁止なのに对岸に抜き
手泳ぎで渡る中学生もいた。もちろん禁止となるほど真ん
中は渦が巻き、亡くなる人や学生も多く”土ご衛門”の言
葉も知り、警察や当時消防組合が走り廻ることも。消防団
は台風となるといつも淀川の水嵩を見回り、年に一度は堤防
が切れるかもと、小学校の鉄筋コンクリの三階に避難指示を
してくださった。ランドセルに教科書を入れ何度か行った。
家庭が断水になると、近隣の方はブリキのバケツを太子橋小
学校に持参し、校庭の真ん中の大きなイチョウの木の下
の水道にも助けられた。

江野川では、緑橋、太子橋、橋寺橋などの木橋で男の子が、
特に夏休みにオニヤンマ・ギンヤンマ・シオカラトンボ・赤
とんぼをトリモチをつけた長い枝や棒網で捕り遊んでいた。
川岸に菜の花や赤い花も白い花も咲いていたが、車の増え
だした昭和40年頃には、ドブ川と呼ばれていたと思う。少
し上流に紡績工場があり、毎日水の色が違って流れて来て
いたし、車社会や汚水のため、ヘドロも川岸に着き出して
いた。私の知る内環状線の出来る前は、一号線沿いに建築資
材置き場があり、子ども達はその屋根から飛び降りたり、
砂や小石を道端に持ち出しては職人さんに追いかけられ、
走り廻っていた賑やかな場所！友人は、信号も無く子供が
行き来し、荷馬車は無論、当時サーカスの象さえ歩いて
いたと言う。隣町の製パン工場から、夕方に甘く香ばしい
ニオイができていた。平太の渡しに向かい真っ直ぐに伸
びてきた道路とともに、子ども達のオアシスであった、駄
菓子のある”よろずや”さんの店とお婆さんは消えた。
そして豊里大橋は、美しい斜張橋が旭区と対岸を結んで
淀川に架けられた！今、大阪市の大動脈として特に多く
の車が行きかう昼間とともに、夕べには市外からも人々
が夕陽の美しさに橋の中央アーチに憩い、カメラで菅原
城北大橋をも写す。

<小椋 昭和21年生まれ>

私たちのリーダーであり、広く教えていただき、
旭区の郷土史の生き字引であった
小井戸茂氏を偲びながら記しました。
平成20年2月ご逝去

■太子橋フィールドワーク(平成19年10月)



「平太の渡し」に乗船してー。

300年続いたと言われるこの渡し船の対岸は、豊かな農村で遙か向うの上新庄あたりまで、農家が点在し畑が広がっていた。田舎に親戚のない私の家では、つてを求めてわずかの衣類などを預かってもらっていた。

平太の渡しへ行くのに江野川にかかる(たしか木の橋だった? ように思う)太子橋を渡り船に乗った。

ー食料調達のための物々交換である(生きていくための智慧、原始にかえった!)。わずかに預けてある衣料の何枚かを引き出して食料にかえるのである。

ちなみに対価は、【若い娘の着物は米3升】、【年寄中年の着物は米1升】と覚えている?

お百姓さんが羨ましくて羨ましくてならなかった。

父母が育ち盛りの子ども達(疎開先からやっと帰ってきた弟妹もいた)の糊口(ここう)をみたすのにどれ程苦労したことか、今の飽食の時代想像だにつかないー。 <竹中>



■ 浚漕船
(写真: 中村英祐)

昭和23年頃はー。

私が小学生だった昭和23年頃は、木造船で手漕ぎであった。自転車と人を乗せて淀川を渡っていました。渡し舟は少し上流にあった浚漕船の辺りまで遡り、そして下流に流され下り対岸に着けていました。対岸の東淀川区は一面菜の花畑で民家はほとんど無かったと記憶しております。

この浚漕船は、非常に長く係留されていました。昭和35年頃までありました。この頃は二上山も大阪城も良く見え生駒山も今と違い近くに見えました。

<中村>



■ 伊勢湾台風(写真: 中村英祐)